

第五章 摂理について

第一節 神は今も世界を治めておられる

ここからウェストミンスター信仰告白第五章、「摂理について」を学びます。第四章では、神が天地万物を創造されたことを学びました。しかし、もし神が世界を創造しただけで、その後は世界を放置されたとしたら、私たちはどう考えるのでしょうか。世界は偶然の力によって動いているのでしょうか。歴史は運命に支配されているのでしょうか。あるいは、人間だけが未来を決めるのでしょうか。聖書は、そのどれでもないと教えます。創造者なる神は、創造された世界を今も支え、導き、その御目的に向かって治めておられます。この神の絶えざる御業を、教会は「摂理」と呼んできました。

一 「摂理」とは何か

「摂理」という言葉は、日常ではあまり使われません。しかし教会では古くから大切にされてきた言葉です。摂理とは、神が世界を創造されたあとも、その世界を保ち、導き、御心の完成へ向かわせておられる働きを意味します。ここで大切なのは、「創造」と「摂理」を切り離さないことです。神は世界を造っただけではありません。神は今日も、その世界を支えておられます。太陽が昇ることも、季節が巡ることも、命が保たれることも、偶然ではありません。すべては神の慈しみと支えの中にあります。詩編百四編は、この摂理を美しく歌っています。神は泉を湧かせ、草を生えさせ、獣にも人にも食物を与え、すべての命を支えておられます。私たちは、その神の世界の中で生かされているのです。

二 神は「最も大きなもの」だけでなく「最も小さなもの」をも治められる

信仰告白第一節は、神が「最も大きなものから最も小さなものに至るまで」すべてを摂理のうちに治めておられると告白します。これは驚くべき告白です。私たちは、「神は宇宙や歴史のような大きなことには関わっておられるが、私たちの日々の生活までは見ておられない」と考えてしまうことがあります。しかしイエスは、「雀一羽さえ、あなたがたの父のお許しがいなければ地に落ちることはない」と語られました。さらに、「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」とも言われます。神は宇宙を支配される方であると同時に、一人ひとりの歩みにも心を留めてくださる父です。だから摂理は、壮大な歴史の教理であるだけでなく、私たちの日常生活の慰めでもあります。

三 偶然は存在するのか

私たちはよく、「偶然助かった」「たまたま出会った」「運が良かった」という言い方をします。もちろん、日常会話としては自然な表現です。しかし信仰の目で世界を見ると、教会は「偶然」を最終的な説明原理とは考えません。カルヴァンは、『キリスト教綱要』の中で、「偶然」という言葉は人間の側から見た表現であり、神の前には偶然はないと繰り返し語っています。私たちには偶然に見える出来事も、神の御手の中では意味を持っています。だからといって、私たちは出来事の一つ一つについて、「これは神がこういう目的で起こされた」と軽々しく断言することはできません。神の御計画は私たちの理解を超えています。しかし少なくとも、世界は無意味な偶然に支配されているのではなく、創造者なる神の御手の中にあると信じることができます。それが摂理の信仰です。

四 摂理の教理が与える慰め

摂理の教理は、ときに厳しく聞こえるかもしれませんが。しかし本来、この教理は信仰者への大きな慰めです。人生には、理解できない出来事があります。病気、災害、別れ、失敗、理不尽な苦しみ。そうした現実と直面するとき、私たちは「なぜでしょうか」と問いかけます。聖書は、そのすべての理由を説明してはくれません。しかし一つのことを繰り返し語ります。**神は今も世界を見失ってはおられない。私たちを見放してはおられない。**創造者である神は、今日も歴史の主であり、私たち一人ひとりの歩みを支えてくださる方です。だから私たちは、理解できなくても信頼することができます。摂理とは、「すべてが分かる」という教理ではありません。「**すべてを治めておられる神がおられる**」という**信仰**なのです。

五 神は「第二原因」を用いて働かれる

ここでウェストミンスター信仰告白は、改革派神学の特徴とも言える大切な教えを語ります。神は万物を直接支配しておられるだけではなく、**被造物そのものを用いて御心を実現される**ということです。神学ではこれを、**第一原因と第二原因**という言葉で説明してきました。第一原因とは神です。すべての出来事の究極の原因は神にあります。しかし神は、その御業を行われる際に、被造物や自然の働き、人間の行動といった「第二原因」をお用いになります。たとえば、収穫は神の恵みです。しかし神は、農夫の労苦を無視して穀物を実らせるのではありません。種がまかれ、雨が降り、太陽が照り、土が養い、人が汗を流す。そのすべてを通して、神は実りを与えてくださいます。ですから、神の摂理を信じる人は、人間の努力を軽んじることはありません。むしろ、人間の働きも神の摂理の器として尊びます。

六 摂理は自然を否定しない

このことは、科学との関係を考えるうえでも重要です。ときどき、「神が働かれるなら自然法則はいらない」と考える人がいます。しかし、聖書はそうようには教えていません。神は自然法則を創造され、その秩序を保ちながら世界を導いておられます。春になれば花が咲き、夏になれば作物が育ち、秋には実りがあり、冬には大地が休みます。この規則正しさそのものが、神の摂理の現れです。ですから、科学が自然の法則を明らかにすることと、信仰が神の摂理を告白することは、本来対立するものではありません。科学は「どのように」を探究します。信仰は「誰が支えておられるのか」を告白します。改革派教会は、この二つを対立させる必要はないと考えてきました。

七 奇跡もまた神の自由な御業

もっとも、神は通常の秩序だけに縛られる方ではありません。信仰告白は、神が必要とされるときには、**第二原因を用いることも、その働きを超えて行動されることも自由であると**語っています。聖書には、そのような出来事が数多く記されています。紅海が分かれたこと。ヨルダン川の流れが止まったこと。イエスが嵐を静められたこと。ラザロがよみがえったこと。これらは自然法則が間違っていたということではありません。自然法則を定められた神が、その創造者として自由に働かれたということです。だから奇跡とは、「自然に反する出来事」というよりも、**創造者なる神の自由な御業**なのです。

八 摂理は人間の責任を奪わない

ここでもう一つ大切なことがあります。神がすべてを支配しておられるなら、「人間には責任がないのではないか」という疑問が生まれます。しかし、聖書はそうようには教えません。神は人間を人格ある存在として創造されました。だから私たちの選択には責任があります。ヨセフは兄たちによってエジプトへ売られました。兄たちの行為は明らかな罪でした。しかしヨセフは後になって、「あなたがたは私に悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために用いられました」と語ります。兄たちの責任は消えていません。しかし、その罪さえも神は救いの御計画の中で用いられました。これが摂理の不思議です。神の主権と人間の責任は、互いに打ち消し合うものではありません。私たちには完全には理解できなくても、聖書はこの二つを共に語っています。

第一節の結び

第一節は、世界は偶然によって動いているのでも、運命によって支配されているのでもないことを教えています。創造者なる神は、今日も世界を保ち、導き、被造物を用いながら、御自身の御目的を実現しておられます。だから私たちは、自分の努力を軽んじることもありま

せん。自然を軽んじることもありません。歴史を悲観することもあります。そのすべての背後に、信実な神の御手があることを信じるからです。そして、この摂理の信仰は、苦しみの中にあっても「神はなお生きて働いておられる」という希望を私たちに与えます。第二節以下では、その摂理が、**罪や試練、人間の失敗とどのように関わるのか**という、さらに深い問題へと進んでいきます。そこでは、神の善なる支配と、この世界に存在する悪との関係について、信仰告白がどのように語っているのかを丁寧に学んでいきましょう。

第二節 神は被造物に縛られない

ここまで神が被造世界を第二原因によって治めておられることを学びました。神は自然の秩序を定め、人間の働きを用いながら、その御心を実現しておられます。しかし、それだけを聞くと、別の誤解が生まれるかもしれません。「神も自然法則に従わなければならないのだろうか」「一度世界を造った以上、神ご自身もその仕組みの中でしか働けないのではないか」。ウェストミンスター信仰告白は、そのような考えを否定します。神は通常、被造物を用いて働かれます。しかし、**神は被造物に拘束される方ではありません**。

一 通常摂理と神の自由

神は世界を秩序あるものとして創造されました。昼と夜が繰り返され、季節が巡り、種を蒔けば実りが与えられる。この秩序は神の知恵の現れです。だから私たちは、日々の生活の中で神の摂理を信頼し、働き、祈りながら歩みます。しかし、その秩序を定められたのは神ご自身です。ですから、神はその秩序に縛られることはありません。創造者は、被造物よりも大きなお方です。もし神まで自然法則に従わなければならないとすれば、自然法則の方が神よりも上位にあることになってしまいます。聖書はそのようには教えません。神は自由な主であり、すべての秩序は神に仕えています。

二 奇跡とは何か

このことを理解すると、奇跡の意味も見えてきます。奇跡とは、神が気まぐれに自然を壊されることではありません。創造者なる神が、御自身の目的のために特別な仕方で働かれる出来事です。たとえば、イエスがガリラヤ湖の嵐を静められた出来事があります。弟子たちは風と波を恐れました。しかしイエス是一言で嵐を静められました。それは自然法則を否定したわけではありません。自然そのものが、その創造者の御声に従ったのです。また、ラザロの復活も同じです。命を与えられた神が、その命を再び呼び起こされたのです。ですから、奇跡は神の自由を示す出来事であると同時に、創造者であることのしるしでもあります。

三 神は「手段なし」にも働かれる

信仰告白はさらに、神は御心にかなうときには、**通常的手段を用いずに働かれることもできる**と教えます。これは、神が全能であることを意味します。私たちは、神がどのような方法で助けてくださるかを決めることはできません。あるときには医師を通して癒してください。あるときには友人の励ましを通して支えてくださいます。またあるときには、人には説明できない仕方で道を開いてくださることもあります。だから信仰とは、「神はこの方法でしか働けない」と決めつけることではありません。神の自由に期待することです。

四 祈りと摂理

この教えは、祈りとも深く結びついています。もし世界が完全に機械のように動いているだけなら、祈りに意味はありません。しかし、聖書は私たちに祈るよう勧めています。なぜなら、神は祈りをも摂理の手段として用いてくださるからです。神は初めから私たちの願いをご存じです。それでも私たちを祈りへ招かれます。祈りを通して私たちは神への信頼を新たにし、神はその祈りを御計画の中に組み入れて働かれます。摂理の教理は祈りを不要にするどころか、むしろ祈りへの確信を深めます。

五 摂理の神は自由なる神

ここまで学んできたように、神は通常、被造世界に与えられた秩序を通して働かれます。だから私たちは、農夫は畑を耕し、医師は病を治療し、教師は学びを教え、親は子どもを育てます。こうした日々の営みは、単なる人間の努力ではありません。神はその一つ一つを御自身の摂理の手段として用いておられます。しかし、だからといって神は、その手段なしには何もできない方ではありません。神は必要とされるならば、人間が考えもしなかった方法で御業を行われます。アブラハムとサラは、高齢となって子どもを持つ望みを失っていました。人間的に見れば、不可能でした。しかし神は約束を実現されました。この出来事は、人間の可能性ではなく、神の自由を証ししています。神は御自身の約束に忠実であり、その約束を実現するためには、私たちの予想を超える道を開いてくださるのです。

六 信仰は「神の自由」を信頼すること

私たちはしばしば、自分の経験や常識の範囲で神の働きを考えてしまいます。「この状況では、もう道はない」「ここまで来たら、もう変わらない」と思うことがあります。しかし、摂理を信じるということは、人間の見通しを信じることではありません。神の自由を信じることです。だから聖書は何度も、「主にできないことがあろうか」と問いかけます。この問いは、私たちの信仰を試す問いでもあります。もちろん、これは何でも願えば奇跡が起こる

という意味ではありません。神は私たちの願いよりも深い御心をもっておられます。しかし、その御心は常に善であり、愛に満ちています。その神に信頼することが、信仰の歩みなのです。

七 摂理は希望を生み出す

この教えは、苦しみの中にある人にとって大きな慰めになります。私たちは病気になることがあります。仕事を失うことがあります。愛する人との別れを経験することがあります。そのようなとき、「神はどこにおられるのか」と問いたくなることがあります。しかし、第五章第二節は、神は決して世界の外から眺めておられる方ではないと教えています。神は歴史のただ中で働いておられます。しかも、その働きは私たちの想像に限定されません。人間には閉ざされて見える道も、神にとっては終わりではありません。この確信があるからこそ、私たちは絶望ではなく希望をもって歩むことができます。キリストの復活そのものが、その最大の証しです。十字架は、人間の目には完全な敗北でした。しかし神は、その敗北と思われた出来事を、世界の救いへと変えられました。摂理とは、この復活の神が、今日も歴史を導いておられるという信仰なのです。

第二節の結び

第二節は、神が被造物の秩序を尊びながら、その秩序に拘束されることのない自由な主であることを教えています。だから私たちは、日々の生活を誠実に歩みます。医療も学問も労働も軽んじません。それらは神が通常お用いになる尊い手段だからです。しかし同時に、それらだけが希望の根拠ではありません。私たちの究極の希望は、**そのすべてを支え、必要な時には新しい道を開いてくださる神**にあります。この信仰は、楽観主義ではありません。歴史の主であり、創造者であり、救い主である神への信頼です。だから私たちは、理解できない出来事に直面しても、「神はなお働いておられる」という希望を失わずに歩むことができます。

第三節 神は手段を用いるが、手段に縛られない

第三節は、第一節と第二節で学んだことをさらに一歩進めます。第一節では、神が通常、被造物や自然の秩序、人間の働きなどを「第二原因」として用いておられることを学びました。第二節では、神ご自身が、そのような被造物や手段に拘束されることのない自由な主であることを学びました。第三節では、その神の自由が、具体的にどのように理解されるべきかが語られます。ウェストミンスター信仰告白は、こう告白します。

「神は、その通常の摂理においては手段を用いられるが、それにもかかわらず、御心のよしとされるままに、手段を用いず、手段を超え、手段に反して、行動する自由をもっておられる。」

ここには、「通常の摂理」と「神の自由」という二つのことが並べられています。神は通常、手段を用いて働かれます。しかし、神が手段を用いなければ働くことができないわけではありません。神は、御心のままに、通常とは異なる仕方でも働くことがおできになります。今日は、この第三節について考えていきましょう。

一 神は通常、手段を用いて働かれる

まず確認しておきたいのは、第三節が「神は通常的手段を用いない」と教えているのではないということです。むしろ反対です。神は通常、手段を用いて働かれます。私たちは、日々の生活の中でそのことを経験しています。病気になれば、医師の診察を受け、薬を飲み、治療を受けます。生活に必要なものを得るためには働きます。食物を得るためには、農業や漁業、流通や販売など、多くの人の働きがあります。神を信じるということは、こうした手段を無視することではありません。「神が助けてくださるのだから、医者に行かなくてもよい」「神を信じているのだから、働かなくてもよい」「神が何とかしてくださるのだから、人間は何もしなくてよい」ということにはなりません。神が手段を用いて働かれることを信じるなら、むしろ私たちは、その手段を大切にしなければなりません。使徒言行録 27 章では、パウロが乗っていた船が嵐に遭います。神はパウロに、船に乗っている人々が助かることを約束されました。しかしパウロは、船員たちが船から逃げ出そうとしたとき、「あの人たちが船に残っていなければ、あなたたちは助からない」と語ります。神が救ってくださるという約束と、人間が必要な手段を用いることとは、対立していません。神の摂理は、人間の行動を無意味にするものではないのです。

二 「手段を用いず」とはどういうことか

では、信仰告白がいう「手段を用いず」とは、どういうことでしょうか。これは、神が何かを行われるとき、必ず私たちが知っている通常の経路を通らなければならないわけではない、ということです。私たちは、物事には原因と結果があると考えます。それは正しいことです。火を燃やせば物が温まり、雨が降れば地面が濡れます。病気になれば、その原因を調べ、治療します。人間関係に問題が起これば、話し合いをして解決を試みます。このような通常の因果関係を大切にすることは、信仰に反しません。しかし、神まで私たちが知っている因果関係に閉じ込められるわけではありません。聖書には、神が通常的手段を用いずに御業を行われた出来事があります。出エジプト記において、神はイスラエルをエジプトから導き出さ

れました。紅海を前にして、人間には逃げ道がありませんでした。しかし神は海を分け、民に道を開かれました。列王記下 6 章には、預言者エリシャが斧の頭を水に落としてしまった出来事があります。エリシャが木の枝を投げると、斧の頭が浮かび上がりました。また、ダニエル書 3 章では、燃える炉の中に投げ込まれた三人の者たちが、火によって害を受けずに守られています。こうした出来事は、人間が通常経験する自然の秩序だけでは説明できません。しかし聖書は、それをもって神の存在を否定するのではなく、神が創造された世界の秩序を超えて、自由に働かれることを証言しているのです。

三 神は「手段を超えて」働かれる

信仰告白は「手段を用いず」と言うだけではありません。「手段を超え」とも言います。ここは大切な表現です。神が手段を超えて働かれるというのは、神が通常的手段を用いながらも、その手段だけでは説明できない仕方で御業を完成されるということです。たとえば、農夫は種を蒔きます。しかし、種を蒔いたからといって、農夫自身が命を生み出しているわけではありません。種が芽を出し、植物が成長し、実を結ぶ。その背後には、私たちの理解を超えた生命の働きがあります。人間は手段を用います。しかし、生命そのものを支配することはできません。パウロはコリントの信徒への手紙一 3 章で、「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」と語ります。ここには、摂理についての大切な姿勢があります。人間は植えます。人間は水を注ぎます。しかし、成長させるのは神です。つまり、神の働きは人間の働きを否定するものではありません。しかし、人間の働きだけに還元することもできません。私たちは手段を用いて働きます。しかし、その手段を通して何が起こるのかを最終的に支配しているのは神です。

四 神は「手段に反して」働くこともできる

さらに信仰告白は、「手段に反して」と語ります。これは第三節の中でも、特に強い表現です。通常 of 自然の秩序から考えれば起こり得ないようなことを、神は御心のままに行うことがおできになる、という意味です。ここで私たちは、「奇跡」という言葉を考えることができます。聖書には、紅海の出来事、病人の癒し、死者の復活など、通常 of 経験からは説明できない出来事が記されています。しかし、ここで注意しなければなりません。奇跡を信じることと、何でも奇跡だと言うこととは同じではありません。信仰告白が教えているのは、「神はいつでも私たちの期待どおりに奇跡を起こしてくださる」ということではありません。むしろ逆です。神は自由な主です。だからこそ、私たちは神が奇跡を起こすこともできると信じます。しかし同時に、神が通常 of 手段を用いて働かれることも信じます。ここを間違えると、二つの極端に陥ります。一つは、「神は自然の法則に従う以外には何もできない」と

いう考えです。もう一つは、「神を信じれば、いつでも通常とは違う奇跡が起こる」と期待することです。第三節は、そのどちらにも偏らない信仰を教えています。神は通常、手段を用いられます。しかし、神は手段に拘束されません。

五 奇跡を求める信仰ではなく、神を信頼する信仰

この点は、私たちの祈りを考えるときにも重要です。私たちは苦しい状況に置かれると、「神様、奇跡を起こしてください」と祈ることがあります。その祈り自体が間違っているわけではありません。しかし、私たちが神に対して、「この方法でなければ助けではない」と条件をつけるなら、私たちは知らないうちに神の働き方を決めてしまっています。神は医師を通して助けることがおできになります。薬を通して助けることができます。家族や友人を通して助けることができます。思いがけない人との出会いを通して助けることもできます。そして、私たちには想像もできない仕方で道を開かれることもあります。大切なのは、どの方法を神が選ばれるかを私たちが決めることではありません。神に信頼することです。イザヤ書 55 章は、雨や雪が天から降って地を潤し、植物を芽生えさせることを語ったあと、神の言葉について、「わたしの口から出る言葉も、むなしくわたしのもとに戻ることはない」と語ります。神は御自身の言葉を必ず成し遂げられます。しかし、その実現の仕方を私たちがすべて知っているわけではありません。だから信仰とは、神の方法を予測することではありません。神がどのような方法を用いられるとしても、神は御自身の約束に忠実であると信頼することです。

六 救いにおいて現れる神の自由

この第三節を、私たちは救いとの関係でも考えることができます。人間の救いは、人間の努力によって達成されるものではありません。ローマの信徒への手紙 4 章で、パウロは、アブラハムが「望みえないのに、なおも望みを抱いて信じた」と語っています。アブラハムとサラには、子どもを持つという神の約束が、人間の可能性から見れば実現しそうにない状況がありました。しかし神は、その不可能に見える状況の中で約束を実現されました。ここでも、神は人間の可能性に拘束される方ではありません。そして、このことはキリストの復活において決定的に現れます。十字架は、人間の目から見れば敗北でした。イエスは捕らえられ、裁かれ、十字架につけられました。弟子たちも散らされました。しかし神は、その十字架を救いの出来事とされ、死者の中からキリストを復活させられました。ここには、神が人間の予想を超えて働かれることの最も深い姿があります。神は、私たちが「もう終わった」と考えるところから、新しい御業を始めることがおできになります。

七 神の自由を、人間の都合のよい自由にしな

ただし、ここでも慎重である必要があります。「神は自由だから何でもできる」という言葉を、私たちの願望を正当化するために使ってはいけません。神の自由とは、人間の願いを何でも実現するという意味ではありません。神は御自身の御心に従って働かれます。信仰告白も、「御心のよしとされるままに」と述べています。つまり、神の自由は、神の知恵と善と聖さから切り離された自由ではありません。神が自由であるということは、神が気まぐれであるということではありません。神は御自身の性質にふさわしく、知恵と愛をもって御業を行われます。ですから私たちは、「神には何でもできる」と言って自分の願いを押し通すのではなく、「神には私たちには見えていない道がある」と信頼するのです。

八 私たちに求められていること

では、第三節を学んだ私たちは、どのように歩めばよいのでしょうか。第一に、通常的手段を大切にすることです。祈りながら医療を受ける。祈りながら働く。祈りながら人と話し合う。祈りながら学ぶ。これらは、信仰の弱さではありません。神が通常用いられる手段を誠実に用いることです。第二に、その手段を絶対化しないことです。医療も万能ではありません。人間の努力にも限界があります。科学にも限界があります。政治や経済の仕組みにも限界があります。私たちは手段を大切にします。しかし、手段そのものを神にしてはいけません。第三に、私たちには見えない神の働きを信頼することです。「もう道はない」と思えるときにも、神の自由は失われていません。もちろん、これは「必ず自分の願いどおりになる」という約束ではありません。そうではなく、私たちが見ている可能性の範囲を超えても、神の御手は働くことができるという信頼です。

今日の結び

第三節は、神の摂理について、非常に大切なことを教えています。神は通常、手段を用いて働かれます。だから私たちは、自然の秩序を尊び、人間の働きを大切にし、与えられた手段を誠実に用います。しかし、神はその手段に拘束される方ではありません。神は、手段を用いず、手段を超え、また手段に反して働く自由を持っておられます。だから私たちは、神の働きを自分たちの経験や常識だけに閉じ込めることはできません。しかし同時に、奇跡ばかりを期待して、通常的手段を軽んじることもできません。摂理を信じるとは、「神がいつ奇跡を起こしてくださるか」を予想することではありません。通常の生活の中でも、思いがけない出来事の中でも、そして私たちには理解できない出来事の中でも、神が自由な主として働いておられることを信頼することです。そして私たちが最後に目を向けるべきなのは、キリストです。十字架と復活は、人間の目には理解しがたい出来事でした。しかし神は、十字架を救いの道とし、復活によって新しい命を示されました。だから私たちは、自分の見通し

だけで神の御業を測ることはできません。私たちに見える道が閉ざされていても、神の御手まで閉ざされているわけではありません。通常の手段を誠実に用いながら、その手段を超えて働く自由な神に信頼する。それが、第五章第三節が私たちに教えている摂理の信仰なのです。